

昭和初期（1925－1937年）のラジオ番組『子供の時間』にみる 音楽に関する考察

A study of music on the radio program 'KODOMO NO JIKAN'
(The Time for Children) in the early Showa period (1925－1937)

葉口 英子
Hideko HAGUCHI

（平成19年9月25日受理）

要旨

本稿は、日本放送協会発足時から始まるラジオ番組『子供の時間』にみる昭和初期（1925－1937年）の音楽をめぐるさまざまな活動に着目し、その内容と変遷を明らかにすると同時に、番組の生産、受容の場にみられる特徴を探り、ラジオという媒体を通じて、子どもと音楽がどのように関連づけられたかを考察するものである。

『子供の時間』は、1925年から41年にかけて放送された教養番組であり、全国の子どもに向けて、教養・娯楽を提供するものとして始まった番組である。毎日夕方に三十分の枠で放送された『子供の時間』では、必ず歌や音楽のコーナーが設けられるなど、音楽は番組内でも大きな位置を占めた。その内容をみると、童謡・唱歌、和楽、洋楽、各楽器の独奏、うたのおけいこ、歌劇といった子ども向けの歌や音楽が数多く紹介されている。当初の番組では、音楽といえば童謡・唱歌のみで占められていたが、次第に歌劇・洋楽・和楽といった種類の音楽も加わり、バラエティに富んだ内容へと変化した。また、番組のテキストと連携した「特選童謡」のコーナーでは、一般の子どもたちが投稿する詞にプロの作曲家が曲をつけた童謡が生まれた。ラジオが一般にも広く普及しはじめ、地方放送局による自局編成が盛んな頃になると、地元の小学生や幼稚園児が童謡・唱歌の合唱団として参加するようになり、各都市で子ども向けの音楽に関連した団体の活躍がみられた。

昭和初期の『子供の時間』が取り組んだ音楽をめぐるさまざまな実践は、子どもたちの音楽環境、音楽経験に影響を与えただけでなく、ラジオという媒体の特性を生かしながら、従来の学校教育とは異なる形で、子どもと音楽が結びつく新たな空間と場を提供したのである。

はじめに

1925年7月、日本放送協会の発足により、ラジオ本放送が東京放送局において開始された。当時、日本放送協会が提案した放送事業では、「報道」、「教養」、「慰安」を三大部門とし、その勢力の拡大をはかろうとしていた。国の一大事業としても注目された放送制度の導入は、人びとの生活を一変させるものとして大きな期待が持たれていた。

ラジオ放送局が登場した当初から、音楽番組は娯楽・慰安放送プログラムとして組まれ

た。音楽番組では和楽と洋楽に大別され、既成の芸能や娯楽を引き継ぐ形で多種多様なジャンルの演奏が放送された。このように、ラジオ放送で音楽が大きな位置を占める傾向は、子ども向けの番組でも同様であった。子どもを対象とした教養番組『子供の時間』では、その開始期から音楽は欠かせないものとして、唱歌や童謡を中心とした歌が紹介されていた。

本稿は、ラジオ番組『子供の時間』について、1925年の開始から本格的な戦局による文化統制が敷かれる1937年までの時期を対象とし、その内容や変遷を明らかにする。また、ラジオというメディアの特性をもって、いかに子どもと音楽を結びつけようとしたのかを考察する。手続きとして、まず、番組の概要を確認し、次に、年代を追って内容の特徴とその変遷をみる。最後に、昭和初期のラジオ放送がどのように子どもたちと音楽を結びつけようとしたか、活動にみられるいくつかの特徴についてまとめ、結論とする。

ところで、近代における子どもと音楽との関連において、本稿が扱うラジオ放送が果たした役割や影響は小さいものではない。しかし、従来から「子どもの歌」や「子どもと音楽」といったテーマを扱ってきた音楽教育学、音楽学、児童文学の領域では、この時期のラジオを介した子どもと音楽に関する先行研究はほとんどないといってよい⁽¹⁾。それとは対照的に、明治期の学校教育における唱歌や大正期の童謡運動については、各分野の研究で数多く取り上げられている。なぜか。その理由は、二点挙げられる。一つは、ラジオというマス・メディアと関連する音楽であるという点である。従来の学問領域にあっては、子どもと音楽を問題にするにあたって、教育的、芸術的な価値が高いものが評価され、重要だとみなされるからだ。したがって、商業的、大衆的な価値を伴う領域になると、たちまち関心は低くなる。つまり、学問領域におけるイデオロギーが壁となって、研究が立ち遅れている現状がある。このことは、音楽学や音楽教育学の領域において、戦後、テレビや音楽産業主導の新しい子どもの歌に対して無関心のままである現状と重なる。

次に、この時代の文化状況に対する否定的な側面が挙げられる。確かに、ラジオという媒体自体がファシズムから戦争へと突入していく時代に、国家の文化統制の最たる機関として、イデオロギー装置としての役割を果たしたことは事実である。実際、『子供の時間』でも1938年以降は、文化統制が厳しくなり、「小国民」に向けた戦歌や軍歌が数多く流れるようになる。しかし、戦前のラジオ放送が政治的に利用されたネガティブな面だけではない。それまでとは質の異なる音楽媒体として、学校の授業や身近に存在しなかった新たな聴取空間と音楽経験を子どもたちに提供したラジオ放送の歴史に光をあて、その意味や意義について改めて問い直すことを本稿では大きな目的としたい。

1. ラジオ放送の開始と子ども番組の登場

1-1. 子ども向けラジオ番組の誕生

わが国のラジオ放送の歴史は、1925年3月22日、東京放送局開局から始まる。その後、大阪、名古屋における放送局が独立して放送事業に取り組んでいたが、1926年8月に三局が合同し、日本放送協会が設立された。

ラジオ放送における音楽は、「慰安」放送の中に組み込まれ、「報道」、「教養」と並ぶ三大部門として重要な位置を占めた。さらに、音楽は和楽、洋楽、演芸といった種目に細分

され、ラジオを通じて多種多様なジャンルの音楽が紹介された。当時のラジオ放送にあっては、国内のレコード産業の進展とも重なり、音楽や歌は欠かせないものであったのだ。

ただし、これらの音楽番組で放送される歌や音楽は、実質的には成人向けのものであって、子ども向けのものとは明確に区別されていた。子どもを対象とした音楽は、教養番組に含まれる『子供の時間』の中で紹介されることになっていた。

『子供の時間』という番組が、いつ、どのような内容から始まったのか、正確な時期を定めることは難しい。記録によれば、1925年7月、東京放送局（JOAK）の本放送初日に「子どもの時間」という副題で、久留島武彦によるお伽口演の演目があり、これが『子供の時間』の始まりではないかといえる。しかし、JOAKに続き、同年に開局した大阪放送局（JOBK）、名古屋放送局（JOCK）でも、本放送が開始された数日後には、唱歌・童謡や童話劇が放送されていたし、両局とも仮放送期間中にも子ども向けの内容を含んでいた。したがって、三局時代、および、それ以前の仮放送段階におけるラジオ草創期では、各局によって子ども向けの番組が始まった時期も内容も異なる上に、流動的な時間帯で放送されているため、定時の独立した子ども番組として確立していなかったといえる。

『子供の時間』が名称を明確にし、独立した番組として開始されたのは、三局が合併し、日本放送協会が設立された翌年の1926年9月である。このとき、『子供の時間』は、JOAKの番組の全面改正を経て、改めて「教養放送」の種目に加えられた。JOAKでは、平日午後6時から6時半まで（日曜・祭日は午前9時30分から10時）の三十分間を『子供の時間』と定めた。そこには、

「児童をして六時になれば間違いなく『吾等の世界』が来るという統一的な観念を起こさしめたい」⁽²⁾

という放送局側の意図もあった。この時間帯の設定は、番組が「学齢前の児童から中等学校一、二年までの年齢」の社会集団を対象としており、学業や遊びを終えた児童が家庭でゆっくりラジオを聞ける時間を想定したからであった。

1927年、熊本・広島・仙台・札幌といった地方中央放送局の開局が相次ぐ頃には、ラジオ受信機の改良や各家庭への普及も進んだ。各地方局が独自の番組編成をおこなうようになり、『子供の時間』は全国的に同じ時間帯の番組として定着していくことになる。

1－2. 番組の位置づけとその理念

ラジオ放送の草創期にあって、ラジオが社会に果たす役割について、日本放送協会は大きく四つの項目を挙げている。その項目とは、「文化の機会均等」、「家庭生活の革新」、「教育の社会化」、「経済機能の敏活化」であり、特に、社会教育におけるラジオの役割が重視された。各局は、その方針に基づいてラジオ番組の制作に努めるよう推進された。これらの方針は、当時は、放送局が政府の通信省による検閲や規制のもとにあり、「社会教育上適当と認められるもの」を放送種目とし、民衆に対する「美風良俗の助長」と「思想善導」に重点をおくよう通達を反映したからでもあった。

当初の『子供の時間』は、他の婦人講座や青年講座と同じく、特定の社会集団に向けた社会教育を促す教養放送としての位置づけが明確にされた。そのため、番組の理念として、まず「児童の知育、徳育、情育をはかること」に重点がおかれた。例えば、JOBK（大阪）

では、番組制作にあたって、以下のような方向性を示している。

- 1 義務教育を基準とする補習教育、課外教育
- 2 国際意識及社会意識の基礎培養
- 3 児童の感受性を対象とする科学知識の普及
- 4 郷土愛の助成、父性愛、母性愛、同胞愛、友愛等と協力する温き情操教育⁽³⁾

この表明からは、教育・国際・科学の目的のもと、子どもを含めたあらゆる階級や年齢層に対する社会教育を促す媒体としてのラジオの意義を強調し、番組の制作に向けて積極的な姿勢の取り組みをめざしたことがわかる。ただし、一方で、

「義務教育制によって教育施設は全国に限なく、また、各種出版物の洪水は、それが子供に関する限りにおいてはほとんど教育的価値の百パーセントを誇称している。現在の子供は「教育」の二字に押し埋め尽くされているともいえよう。放送はさらにこれに架して亦教育をかざして子供を教へんとするものであらうか」⁽⁴⁾

「疲労して家庭に帰って来た児童に対して一日中の最もよき慰安の糧として十分に咀嚼し、児童をして心身共に爽快に、明日への活力を補足せしむるに足るものを送る意図のもとに企画されて来たのである。」⁽⁵⁾

といった記述からもわかるように、当時の子どもたちを取り巻く環境を鑑みて、教育的な価値ばかりが優先されている傾向を危惧し、子どもたちに向けた慰安や娯楽を提供するものとしてのラジオ放送のあり方も考慮されている。詳しくはのちの3章で触れるが、黎明期の制作者においては、その理念と実際の聴取者の反応の間で揺れ動きながら、試行錯誤のもと作業をおこなっていたのだ。

1-3. JOBKにみる番組制作

当初、子ども番組の制作担当者は、社会番組や教育番組との兼任でおこなわれていた。子ども番組の係が明確になったのは、1927年頃だと推測される。翌年には、局内において社会教育課ができ、教育・教養・婦人家庭・子どもという係の分担がなされ、各二名ずつがその担当にあたった。

とりわけJOBKは、『子供の時間』に非常に熱心に取り組んだ放送局である。例えば、児童の年齢や発達段階を考慮し、『子供の時間』から『幼児の時間』を分化させた試みを東京に先駆けておこなっている。また、『子供の時間』の自局編成回数が全国一位であった功績もある。現在でいうところの番組プロデューサーといえる足立勤は、放送開始期から十七年間、JOBKの子ども向け番組の制作を担当した一人であるが、東京に比べ、有名な童謡歌手をはじめとする出演者が少ない大阪にあって、自ら幼稚園や小学校に出向き、人材養成をすすめるなど、関西の児童文化の発展に貢献した第一人者である。足立の当時のコメントには、

「私の苦心している事は『子供の時間』を子供の手に渡してやりたいといふ事です。子供は玩具を見せた丈では満足しません。その玩具を渡して弄ばせてやるといったやうなもの。即ち唯音楽や童謡をきかすだけでなく、その放送された童謡を自分のものとしてお遊戯できるやうに」⁽⁶⁾

というものがある。このコメントからは、ラジオから単に音楽を流すだけで子どもたちを喜ばせるだけでなく、その音楽実践に子どもたちを巻き込み、子どもたちが主体となる音楽活動を試みようとした考えがみてとれる。

この考案は、地元の幼稚園や小学生を放送局に呼び、マイクの前で歌を披露してもらうという具体的な実践にもあらわれた（図1）。例えば、大屋政子の回想⁽⁷⁾では、1930年前後に小学校高学年だったと推測される当時、『ウサギウマ』という歌をJOBKのスタジオでピアノ伴奏に合わせて独唱した経験について触れている。自局編成番組が東京を凌いでいた大阪では、放送局を拠点とした地元の子どもたちの参加型による音楽活動が活発におこなわれた。



図1 三越時代のJOBKの番組で、合唱で出演した大阪市北市民館の幼稚園児たちの様子

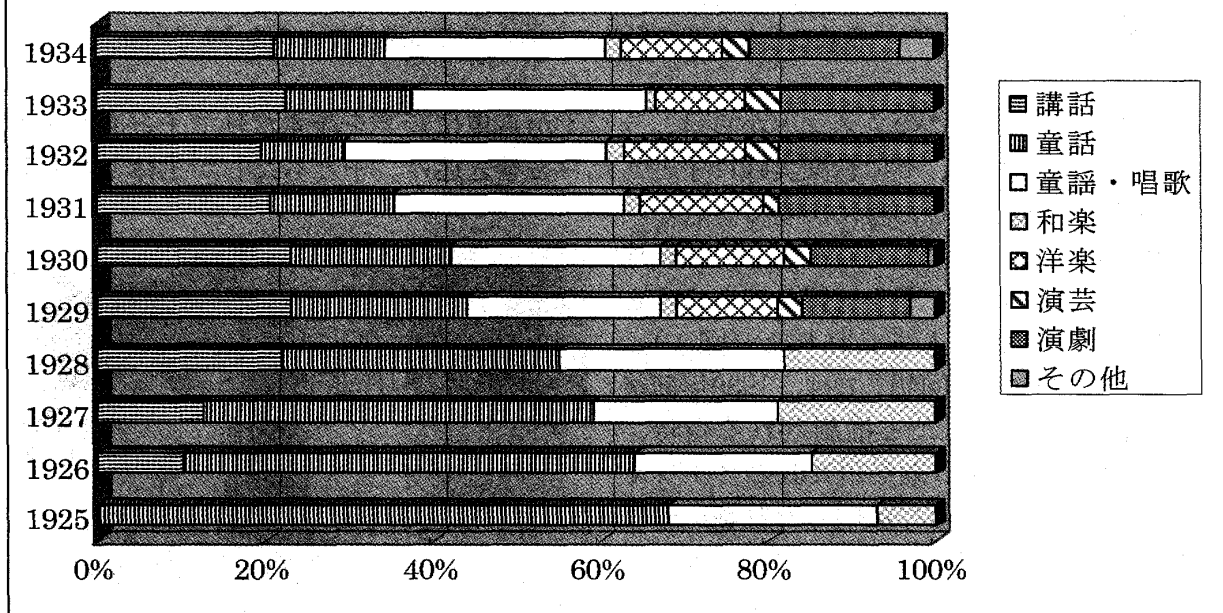
2. 『子供の時間』について

2-1. 『子供の時間』の内容の変遷

『子供の時間』の内容については、放送プログラムが記録されている日本放送協会出版局発行の『ラジオ年鑑』、『放送月報』、『放送』を参考に、データを収集し、分析をおこなった。項目については、放送時間、発信局、放送日、種目、題目、出演者に分類し、さらに、種目については、1. 歌（童謡唱歌）（1. 団体合唱団、2. 小学生・幼稚園児、3. おけいこ、4. 独唱・児童、5. 独唱・成人）、2. 洋楽（1. 管弦楽、2. 吹奏楽、3. 独奏）、3. 和楽（1. 箏曲、2. 童曲、3. 和洋合奏）、4. 歌劇（唱歌劇、お伽歌劇、童謡劇すべて）、5. その他、に分類し、集計した。なお、これらのデータは、項目については、1925年から1934年までの記録しかなく、また、種目については、1934年以降の記録しか存在していないなど、全体を通じて比較するためには、データのばらつきが諸所にでてきた。しかし、本稿が対象とする1925年から1937年までの番組の内容やその変遷を知るには十分なデータだと考える。

黎明期の『子供の時間』は、「講話」・「童話」・「童謡劇」・「音楽」の四種目が主な構成であるが、表1の1925年から1934年までの種目別割合をみると、童謡・唱歌のみで、当初から平均して25%というおよそ四分の一を占めている。それに和楽が加わると、音楽のプログラムだけで、半分の割合にまで及ぶ。1928年以降は、和楽にとって代わる形で、洋楽の割合が高くなってくるが、「演芸」の中に、唱歌劇やお伽歌劇が含まれていることを考慮すると、番組の内容の半数は、音楽に関連したプログラムで編成されていたことがわかる。

表1 『子供の時間』種目別割合(1925-1934)

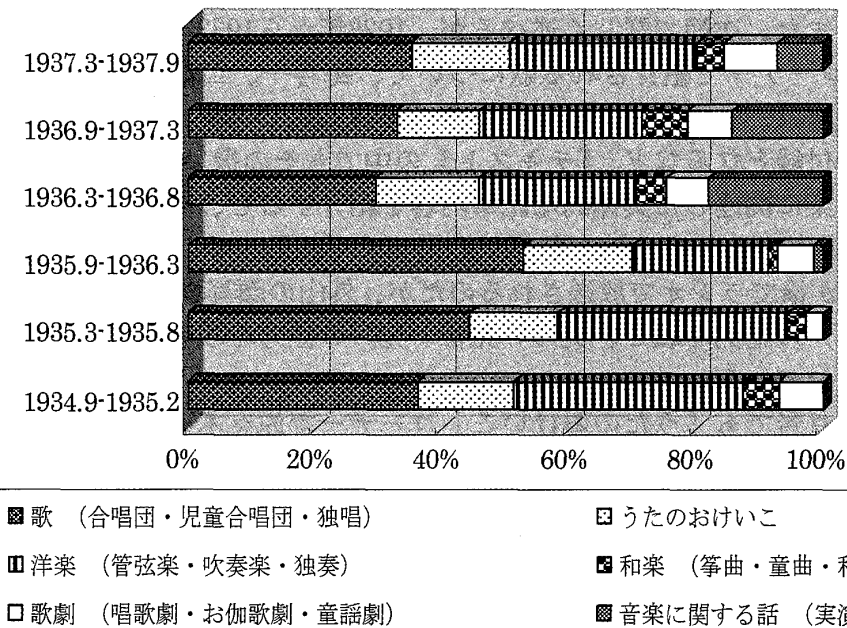


さらに、『子供の時間』に登場した歌の種類や歌手を細かくみると、明治期以降の学校教育で習う唱歌と大正期の童謡運動で作られた童謡が非常に多く放送されている。例えば、1925年から1930年にかけて、一番多く放送されたジャンルは、童謡であり、五年間で2,542回の演奏がおこなわれている。続いて多いのが唱歌で1,936回である。歌い手は、JOAK唱歌隊という専属の大人の合唱グループがもっとも多く、次いで、本居みどり・貴美子、綿貫静子、平井英子といった当時活躍した子どもの童謡歌手が上位を占める。また、子どもの合唱グループや一般の小学生、幼稚園の子どもたちも歌い手として参加している。

1933年以降の『子供の時間』では、「講話」、「童話」、「童謡・唱歌」、「洋楽」、「和楽」、「演劇」、「実況描写」、「演芸」と種目の多様化が顕著になった。プログラムの内容自体も多様化し、引き続き童謡・唱歌の斉唱・合唱・独唱が中心ではあったものの、「洋楽」では、ピアノ、ヴァイオリン、ハーモニカといった楽器の独奏や管弦楽が加わり、唱歌劇、お伽歌劇といった演目も登場するようになった。

表2(巻末)は、地方局の開局が相次ぎ、番組の内容が充実してきた時期にあたる1935年の二ヶ月分の放送内容を抜粋したデータである。その種目は、「童謡・唱歌」、「和楽(長唄・箏曲・琵琶・謡曲・その他)」、「洋楽(管弦楽・吹奏楽・室内楽・ピアノ・ヴァイオリン・マンドリン・ハーモニカ・木琴・シロホン)」、「演劇(唱歌劇・童謡劇・お伽歌劇・少女歌劇・ラヂオレビュー・童謡遊戯)」である。当初の「童謡・唱歌」のみだったことと比べると、音楽プログラムの多様化、細分化が進んだことがわかる。表3は、1934年から1937年までの、音楽プログラムについて、種目の割合の内訳を示したものである。

表3 音楽に関連した種目の割合（1935－1937）



1935年前後から番組の定番となった「うたのおけいこ」は、評判の高いプログラムとなった。月一回発行される『コドモのテキスト』では、毎月の課題曲を読者に知らせ、声楽の専門家が課題曲の解説と歌い方を説明した。

『子供の時間』の音楽プログラムは、その開始とともに、充実した内容をみせていったが、十年を経た1935年前後にピークを迎え、1937年あたりからその活動に翳りが見え始めた。1937年、日本は日中戦争に突入し、続く1939年の第二次世界大戦の参戦によって、国内でも本格的な戦時体制をとることになった。

1941年、全国の小学校が「国民学校」と改称したことに対応して、『子供の時間』もまた『小国民の時間』と名前を変更する。こうして、放送協会による全面的な番組改正と同時に、戦争への理解と積極的協力を求める政府の方針が、ラジオ番組の内容、制作に反映され、もちろん子ども向けの番組もそれに応じることを余儀なくされたのである。レコード童謡やクラシックは禁止され、「進め小国民」や「小国民進軍歌」といった歌がさかんに流れるようになり、子ども向けの音楽や歌もまた一斉に軍事色の強いものへと変貌した。

2-2. 『テキスト』との連携

日本放送出版協会は、『子供の時間』の番組制作と並行して、月一回のペースで1929年から1938年にかけて、『コドモのテキスト』（または『子供のテキスト』：以下『テキスト』と略記）を発行している（図2）。この雑誌は、「ラジオが耳よりの効果のみの性質なので、その足りないところを補うテキスト」という目的のもとに発刊されたものであるが、内容は、翌月に放送予定の中



図2 『子供のテキスト』の表紙

央放送局のプログラムについて、豊富な写真や挿絵を添えて事前に紹介するといったものである。この雑誌で音楽に関連した記事では、童謡、楽器、歌唱指導、著名な音楽家の話が掲載されている。また、次節で詳しく述べるが、1928年から1933年にかけて放送された「特選童謡」というコーナーで紹介される歌について、毎号一、二編の童謡の楽譜が掲載されている。この楽譜は、巻頭ページにカラーのイラスト付で掲載されたり、折り込み付録や二色刷りの別冊付録となるなど、『テキスト』の中でもその扱いは特別であった。

『テキスト』の音楽に関連した具体的な記事内容を紹介すると、例えば、1929年4月号には、「コドモ音楽講座」として、外山国彦が担当した「唱歌の唱ひ方」が掲載されている。記事と同じ内容が後でラジオで放送されるのだが、外山の顔写真とともに「鳩」（ポッポ ポッポ ハトポッポ）の譜例を載せ、美しい発音・発声の仕方を喉の動きや呼吸について細かな説明が加えられている。

同じく、1931年4月号でも「うたのおけいこ」コーナーで佐々木すぐるが作曲した「昭和の子供」、「狸の茶釜」、「太鼓橋」、「雷さま」の四曲について、楽譜とともに以下のような歌唱指導が書き加えられている。

「上手な方は一層上手に、すきな方は一層すきになられることは申す迄ありませんが、私と一しょにお歌ひ下さいますと、下手な方も上手に、きらひな方もきつと好きになれるといふ、ふしぎなおしへ方をいたしますから、下手な方、きらひな方もこんどだけはぜひお歌ひください」⁽⁹⁾

こうした解説をした作家自身が放送上でもプログラムを担当し、幼稚園から中学校までの聴取者を対象に、童謡の紹介や歌い方を丁寧に解説した。ラジオを通じて歌を聴いたり、習うことは、学校の音楽教育においても歌唱指導といったものが十分におこなわれていなかった時代にあって、非常に画期的な試みでもあったといえる。

2-3. 童謡を作る子どもたち

『テキスト』に関して、『子供の時間』と連動した音楽実践として特筆すべきなのは、創刊号からはじまる「当選童謡」というコーナーである。この企画は、毎月特定のテーマのもとに童謡を読者から募集するもので、当選者五名には時計をはじめとする賞品が送られることになっていた。さらに、最優秀作一編については、『テキスト』に掲載されるというものだった。このコーナーは、1931年以降、「特選童謡」と名称を変えるが、読者から送られてきた童謡に、作曲家が曲をつけるという慣例になった。『テキスト』にはその歌詞と楽譜が掲載された。こうした歌詞のみの童謡に曲をつけたのは、プロの作曲家たちで、当時一線で活躍していた勿々たるメンバーが名を連ねている。山田耕筰、近衛秀麿、室崎琴月、梁田貞、藤井清水、本居長世、成田為三、井上武士、中山晋平、草川信、佐々木すぐる、堀内敬三、吉原規、大中寅二、弘田龍太郎、長谷川良雄、高木東六、宮城道雄といった当時の歌曲や流行歌をはじめ、唱歌・童謡を数多く創作していた作曲家たちである。

「特選童謡」がその最盛期を迎える1930年代半ばには、入選した歌が番組上の「うたのおけいこ」にも採用された。また、毎号その月のレッスンの予告として、歌詞、楽譜、歌の先生の他に、童謡の入選者の子どもたちの紹介記事が写真とともに掲載された。歌の指導者は、ダン道子、平井美奈子、四家文子、武岡鶴代、柴田秀子、黒沢貞子、菊池綾子な

ど、女性の声楽家が担当した。当時の投書欄には、「うたのおけいこ」について、以下のような子どもたちの発言がある。

「子供の時間にダン道子先生の、『歌のおけいこ』があったのですが、それは嵐のためたうたが聞かれませんでした残念でしたね。今夜は又、六時からダン先生の『歌のおけいこ』、7時半から『供の』があるのでとても楽しみにしてゐるのです。（伊豆、濱田正也）⁽⁹⁾

「僕、楽譜が二つになつて其のおけいこがあるのがうれしくて毎月まつて居ます。ダン道子先生のお歌とても、よくわかつて好いですね……。 （和歌山県、岡本良二）⁽¹⁰⁾

この企画は、子どもたちにも概ね好評だったようだ。また、自分の創作童謡が入賞して放送されることや賞品が届くことを楽しみにしていた様子を伝える手紙も多く見受けられる。例えば、1932年の『テキスト』には、

「外山国彦先生のうたのおけいこ待遠しいわ、だって皆様のお作を唄ふのですから……。」（大阪市 柴田多紀子）⁽¹¹⁾

といった投稿も載っている。「うたのおけいこ」で使われる曲が、聴取者である子どもとプロの作曲家の合作であるというのは、子どもたちにとっても作り甲斐のある面白い企画であったにちがいない。

しかし、残念ながらこれらの童謡は、本来の意味での子どもの愛唱歌とはなりえなかった。なぜなら、応募作品のテーマを「ラジオ放送に関係するもの」に限定していたからである。例えば、1930、31年の「特選童謡」に選ばれている作品「ラヂオは何處でも」、「ラヂオごっこ」の歌詞をみてもわかるように、

ラヂオを聞いてゝ考へた 四國のおばさんも聞いてゐる
北海道のおちさんも聞いてゐる おんなじことをおんなじときに
ニコニコしながら聞いてゐる ニコニコしながら聞いてゐる
（竹田正虎作詞・草川信作曲）⁽¹²⁾

今日は楽しい日曜日 ラヂオごっこで遊びませう
片手を顔の前に立て まるく握ればマイクです
今日は嬉しい日曜日 ラヂオごっこで遊びませう
両手を高く空に立て グーッと伸ばせばアンテナだ
（伊藤仁作詞・藤井ひそむ作曲）⁽¹³⁾

といった具合に、歌詞には常にラジオに関係した言葉が入っていなければならない制約があったため、テーマが自由となる1936年までの童謡には、すべて「アンテナ」、「受信機」、「スピーカー」、「ラヂオ」、「マイク」といった語を含んだ同工異曲の作品が連なった。そのため、一般の唱歌や童謡のように、学校の音楽教材として取り上げられたり、レコードとして発売する流行歌のような形で、広がりをもつ歌ではなかった。「特選童謡」は、子

どもたちにより歌を提供するというよりも、むしろ、新しいメディアであるラジオをいかにして子どもたちに親しみを持たせるか、惹きつけるかといった制作者の策としての意味合いが強かった。つまり、「特選童謡」は、ラジオを聴取する子どもたちに対して、いわばラジオのキャンペーンソングとして機能した側面が大きかったのである。

次に、『テキスト』には、音楽に関連した記事が少なくなかった。1933年以降の『テキスト』には、「ラジオのお友達」という見開きのグラビアコーナーがあり、本多信子、河村順子、永岡志津子、平山美代子、中山樫子、松本俊枝、大川澄子、望月誠など各レコード会社専属の童謡歌手をはじめ、番組に出演したJOAK唱歌隊、長谷山雛菊音楽会、HK子供会、三日月子供会、メリー合唱団など、各地方放送局所属の合唱団や童謡劇団のメンバーが写真で毎月紹介された。また、この『テキスト』には、広告が掲載されているのだが、ポリドールレコード、ビクターレコード、コロムビアレコードといったレコード会社やハーモニカやピアノといった楽器会社の広告がほとんどであった。国内のレコード産業の進展がめざましかった当時の状況にあって、図3のような「児童レコード」をはじめとする、童謡、唱歌、絵本話、紙芝居、児童劇を吹き込んだ歌やお話のレコードがイラストや歌手の写真つきで紹介された。昭和初期に隆盛をみせたレコード童謡は、ラジオ放送とレコード会社がタイアップする形で、子どもたちに認知され、享受されていた様子も伺われる。



図3 コロムビア児童レコード「可愛い天才 大川澄子童謡レコード」の広告

番組と『テキスト』が連動してきた歩みは、十二年で終止符を打つ。1927年には、楽譜付きの「特選童謡」が中止となった。1938年以降は、「特選童謡」の曲ではない、軍色の強い子どもの歌が用いられるようになる。「特選童謡」の募集と連載は継続されたが、童謡には曲がつかなくなり、読者の小・中学生を中心とした自由詩として、当選作品を紹介するのみになり、1939年には『テキスト』そのものが終刊となったのだった。

2-4. 聴取状況

実際に『子供の時間』が当時の子どもたちにどのように受容されていたのか、アンケートによる統計調査の結果から聴取状況について確認する。

1928年3月に「東京市内の十五区の総数二百有余校の尋常四、五年、及び高等科各級児童に対する調査」が実施されている。1928年というのは、ラジオの受信契約者数が30万に達したときであり、ラジオ放送は七局時代を迎え、全国中継放送も可能になった時期である。調査では、ラジオを「聞いている」49%、「時々聞く」18%、「聞いていない」33%となっている。したがって、都市部ではおよそ七割弱の子どもたちがラジオを聴取した経験があったといえる。そして、『子供の時間』で、好きな項目は「童話劇」が男子・女子生徒のそれぞれ半数が支持しており、童謡・唱歌や歌劇も上位にあがった。

続いて、1931年に、関西支部の二府八県の聴取者24万人を対象に、回答総数10万3,000通の大規模な嗜好調査がおこなわれている。一日平均9時間半の放送時間のうち一割強を

占めた『子供の時間』は、大人にも子どもにも人気のある番組であることが示された。また、1933年の35万8千人によるアンケートでは、回答数の74%が『子供の時間』を聴取していた。この調査では、「童謡・唱歌」が特に好まれていたと報告されている。1935年には、ラジオの聴取者は300万人を突破し、四世帯に一台の割合でラジオ受信機が普及するほどの浸透ぶりをみせた。

以上のような調査からもわかるように、ラジオ放送が社会や各家庭への浸透に伴い、『子供の時間』は子どもたちの人気番組であったことがわかる。もちろん、それでもまだ高価な機器であったラジオは、家庭の所得の違いによって大きな格差もあったことに加え、ラジオの設置状況が都市部と農村部との間で不均等であったことは否めない。しかし、ラジオ聴取が可能であった人びとにとっては、『子供の時間』も夕方という放送時間帯の有利さもあって、知名度も高く、享受されていた番組であった。

3. 子どもとラジオと音楽の結びつき

3-1. 教養から娯楽へ

昭和初期の『子供の時間』は、教養放送という枠組みの中で、子どもに対する社会教育の役割を担うものとされた。1章でも触れたが、事業の開始から唱えられたラジオ放送がめざす一義的な理念としての教養主義は、一方で、ラジオが一般に普及するに従い、広く人びとの慰安・娯楽を提供する役割を果たすべきだとする意見が強まっていくなかで、放送の枠組みや方針にジレンマを引き起こす原因ともなった。当時の批評家や知識人の間では、慰安・娯楽プログラムが大衆文化に擦り寄る形で、傾倒していく状況を危惧する意見が目立つようになった。こうした意見が高まるなかで、特に、音楽に関しては、当時の庶民の流行音楽であった俚謡、俗謡、流行歌がラジオから流れることは、民衆文化の低俗性につながるとして、教養のある高級音楽である洋楽＝クラシック音楽を流すべきだといった意見も少なくなかった。

このラジオ放送の役割が教養か娯楽か、という議論が高まる以前に、『子供の時間』の制作者は、試行錯誤のもと番組制作にあたりながら、投書欄の意見やアンケートをおこなうなどして、主な聴取者である子どもたちの反応や声を積極的に取り入れようという姿勢をみせている。例えば、1928年に『子どもの時間』の担当者が小学校の教師と高学年の児童にアンケートを実施している。その結果では、「教育的で、しかもおもしろくあってほしい」といった声が多数寄せられた経緯も踏まえ、後者の「おもしろく」といった要望をどのように番組に反映させるか、を重視し、今後は教育的な側面ばかりを強調するのではなく、子どもの娯楽や慰安も考慮して、番組制作にあたる必要性があるとして、結果をまとめている。

そのため、『子供の時間』では、番組制作の試行錯誤のプロセスの末に浮上してきたであろう、娯楽を重視した内容へのシフトがはっきりとみてとれる。例えば、1930年初頭の『子供の時間』に持ち込まれた題材というのは、お伽口演、レコード童謡、宝塚歌劇団、紙芝居といったもので、同時代に流行している子ども文化から引き継いだ演目による構成が顕著だ。そこには、教育的な配慮を優先するという姿勢よりも、巷で子どもたちに人気のあった演目に着目し、娯楽的な要素を取り入れようという姿勢が強くみられる。

特に、東京のJOAKが教化・教養主義的であった傾向があるのに比べ、『子供の時間』の自局編成率が全国一位であり、熱心に制作活動に取り組んだ大阪のJOBKはより慰安的、娯楽的な方向性を強く示した。そのJOBKの姿勢をうかがうことのできる制作者のコメントがある。

「子供はいつも動いてゐる!! 子供はつねに進んでゐる!! そして余りにいぢめられすぎてゐる今日の子供達。・・・子供の時間のプログラムには出来るだけ子供達を喜ばすことの出来る様なもの、一言で云えば娯楽中心のものを主として選んだのであつた。」⁽¹⁴⁾

このコメントは、夏休みの休暇中の話として留保してはいるものの、子どもの娯楽としてのラジオ放送の役割を主張している。特に、JOBKは、音楽は子どもの娯楽や慰安のために欠かせない重要なものであるという認識が強く、地元の音楽活動を支える拠点となった。

『子供の時間』が、特に、1933年から1936年までの間、バラエティに富んだ充実した内容をみせたように、教育主義的なものから娯楽的なものへという方向性は確実な流れであった。しかし、社会情勢が戦局へと傾斜し始めた1936年を過ぎてから、『子供の時間』もそれまでのような取り組みがみられなくなった。ラジオが国家の文化統制の最たる機関として、戦争に資する媒体となるに従い、『子供の時間』もその内容が大きく変化した。

3-2. ラジオをめぐるネットワーク

ラジオ放送をめぐるさまざまな活動は、子どもと音楽を結びつけるメディアとして、新たな聴取空間を提供しただけでなく、子どもたちの音楽経験の創出にも関与した。

まず、先にみた『子供の時間』で募集された特選童謡のコーナーは、聴取者である子どもたちをその生産と受容の双方の場に巻き込む形で展開した。当時のテキストの投稿者欄「放送室」にみる子どもたちの様子は、例えば、「特選童謡」の入選者が近況報告とともに、当選のお礼や感想を述べたり、常連入選者あてへのメッセージや童謡創作に励んでいる様子を伝える投稿が目立つ。自分の作った詩が入選した上に、テキストに掲載される曲となり、番組で歌となって放送され、さらに、それを全国の子どもたちが聞き、習い、口ずさむといった過程は、子どもたちが童謡を作ったり、歌を覚える際の動機や励みともなった。

また、放送局が、歌を歌ったり、楽器を演奏する子どもたちの活動を全国的な規模で支えることにもつながった。ラジオ放送には、大正末期から活躍していた子どもの童謡歌手も多く出演したが、その後、地方放送局が創設されると、地元の小学校児童や童謡グループも多く出演していた。

このような活動の様子は、1933年以降の毎号のテキストには、「ラジオのお友達」という見開きのグラビアコーナーで知ることができた。各レコード会社専属の童謡歌手をはじめ、JOAK唱歌隊、かなりやリズム・バンド（図4）、山雛菊音楽会、HK子供会、三日月子供会、メリー合唱団など、



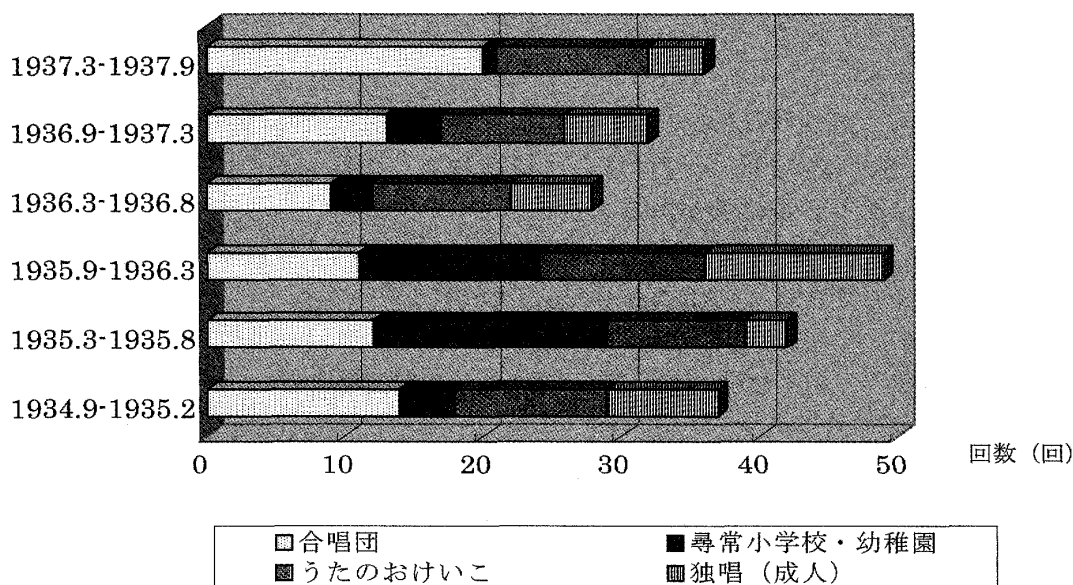
図4 1933年 11月の東京放送局にて「日本で初めてのリズム・バンド」として紹介されたかなりやリズム・バンド

各地方放送局所属の合唱団や童謡劇団のスタジオ放送での演奏の様子が写真で数多く紹介されている。

また、仙台市にラジオ放送局が設立されたのは1928年であるが、『仙台児童文化史』（遠藤：1996）によれば、この放送局の開局が、地元の児童文化運動の推進に大きな役割を果たしたという。例えば、毎日の『子供の時間』のプログラムで、出演者を地元の児童文化に携わるグループや学校児童に委ねることになり、「仙台児童倶楽部」、「七つの子社」、「児童音楽園」といったグループがラジオに出演することになった⁽¹⁵⁾。また、市内の日曜学校や児童倶楽部の会もラジオ局のマイクの前で歌を披露した。放送局のこのような試みによって、「地元のいろんなグループが、ラジオに出演することで、いわゆるステータスを上げ、お蔭で活動しやすくなった」⁽¹⁶⁾ のである。地方局を拠点とした音楽活動の様子は、他の地方放送局でも同じような事例が多くみられる。表4をみてもわかるように、1935年には、小学生や幼稚園児が出演者として多く登場している。歌い手としてプロの合唱団や童謡歌手が多く登場したラジオ放送の初期とは異なり、各地方局の開局と中継技術の発達に伴い、地元の小学生の参加が目立つようになった。こうした一般の小学生参加型の番組制作によって、子ども向けの音楽に関連した合唱団や歌劇団による活動がさかんにおこなわれたのである。

同じような音楽実践のあり方は、子どもだけでなく大人のグループにも波及した。ラジオ局を中心に音楽活動に関連したネットワークの広がり背景には、表5からもわかるように、各都市に地方局が相次いで開局され、『子供の時間』が多く放送され始めたことにもよる。大都市の東京や大阪の制作に頼るのではなく、地元の活動を紹介するようになったこともあり、ラジオ局がローカルレベルで子どもの音楽文化を推進する役割も果たしたといえるだろう。

表4 唱歌・童謡の出演者の推移（1934－1937）



3-3. 聴く子ども

前章では、アンケートによる統計的調査から『子供の時間』の聴取状況をみたが、実際の子どもたちの反応や様子について、『テキスト』の「綴方」や「投稿者」のページの記述から知ることができる。

ラジオ聴取と並行して、『テキスト』を購入していた子どもたちは、自分たちと変わらない年齢の一般小学生や童謡歌手の活躍を写真や活字で知り、加えてラジオ放送でその歌を聴くことで、等身大の彼らを身近に感じることができた。また、投書欄を通じて、ラジオの番組や音楽をめぐる、子どもたちが活発な文通や意見交換をしている様子も見受けられる。

1928年、全国中継放送が可能になると、『子供の時間』は全国的規模のネットワークを備えるようになった。当時の子どもたちの感想には、

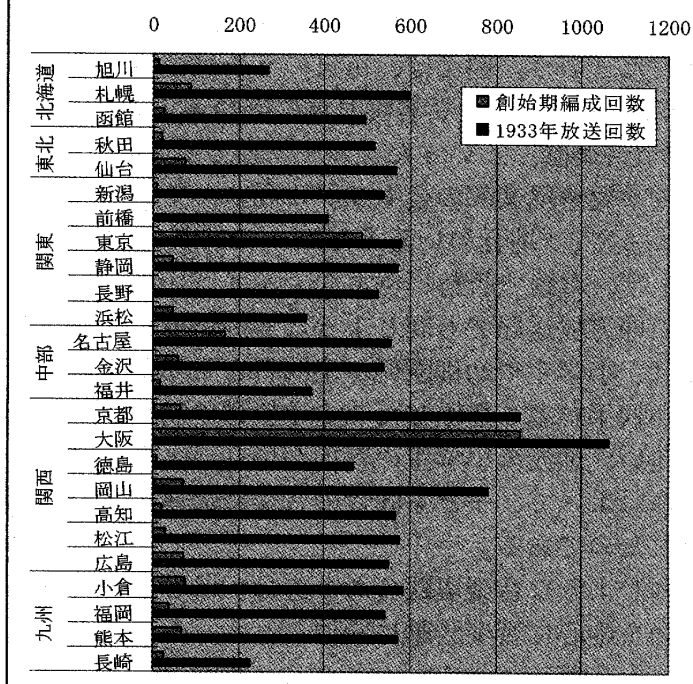
「私はラジオが創設されてからずっと聴取して居る一人ですが、テキストの愛読者となつたのは新年号からです。六時のコドモの時間と引き合わせて見るのが待ち遠しい位です。東京、仙台の様な遠隔の地で放送なさるのも、南国の熊本では手に取る様に良く聴こえます。科学の力と言ふものは有難いものですね。」(大阪市の女兒からの投稿)⁽¹⁷⁾

とあるように、子どもの日常世界における時間的な感覚や地理的な感覚を従来とは異なる質のものへと変えた。例えば、1931年11月号の「特選童謡」に寄せられた童謡の一つに、「おうたの時間」というタイトルの歌がある。

JOHK おうたの時間がやってきた AKのみんなもうたつてる
BKのみんなもうたつてる CKのみんなもうたつてる
山越え 川越え 日本中で みんなが一緒にうたつてる (小原倫作詞)⁽¹⁸⁾

この歌詞の内容にみられるように、ラジオはそれまでのメディアとは異なる形の時間と空間を人びとに提供した。それは、同じ時間に、同じ歌を全国の子どもたち(人びと)が聞いているという地域性を越えた新しい聴取体験でもあった。全国規模のネットワークをラジオの音で感受した子どもたちの体験は、『テキスト』の投書欄や文通コーナーにおける意見交換にもあらわれた。地域性を越えたある意味ナショナルという表象をまとったラ

表5 各地方局の創始期の編成回数と1933年の放送回数の推移



ジオの音を通じて、歌や音楽を聞き、歌う子どもたちが体験した音楽経験は非常に新鮮なものであったにちがいない。

おわりに

ここまで『子供の時間』の内容、および番組を取り巻く音楽と関連したさまざまな取り組みを確認してきた。この昭和初期の『子供の時間』にみる音楽実践は、単にスピーカーを通じて一連の子ども向けの歌や音楽を紹介するだけにとどまらず、子どもたち自身が歌を歌ったり、楽器を演奏したり、歌を作ったり、という活動にまで及んだ。つまり、ラジオ放送は、当時の子どもたちにとって、音楽を受容する側面のみで重要な意味を持っただけでなく、ラジオ放送の生産の場面においても子どもと音楽を結びつける活動拠点としても機能した。ラジオは子どもたちを取り巻く音楽環境に影響を与えただけでなく、その媒体の特性を生かしながら、従来の学校教育とは異なる形で、子どもと音楽が結びつく場を提供したのだといえよう。

それらの実践の大きな特徴の一つは、番組を通じて社会集団としての「子ども」を主体化し、「子ども」という概念をラジオというメディアを通じて再構成する役割を果たしたということである。『子供の時間』は、それまでの学校教育や生活空間ではない、いわば電波によるネットワークが織り成す時間・空間から新たな子どもの文化領域の出現を可能にした。そして、ラジオの電波によって浮上してきた新しい空間から同時代的な子どもの姿が写しだされた。

ラジオ放送の出現によって、人びとの音楽環境は大きく変化した。ラジオという時間と空間を超えたコミュニケーションを可能とする聴覚メディアのあり方は、それまでの音楽の媒体であったレコードや演奏会とはまったく異なった生産、受容のあり方を提供することになる。特に、1920年代後半から30年代にかけてのラジオ放送は、昭和モダニズムと称される文化の中で浮上しつつあった「大衆」と呼ばれるようになる人びとに娯楽・慰安を担うものとしての役割を果たしていた。その中で、音楽の位置づけは重要であった。何よりもラジオが聴覚に拠るメディアであったため、ラジオと音楽との親近性は必然的であった。こうした文化社会的背景のもと、昭和初期にみる『子供の時間』は、ラジオ放送の音楽を通じて、子どもという社会集団を改めて捉えなおすと同時に、それまでの教育的な文脈にはない、大衆文化としての子ども文化を編成したといえよう。

最後に、ラジオ放送の創始期から始まった『子供の時間』は、1936年前後をピークに衰退していくことになる。1937年には、国民精神総動員運動が実施され、音楽・演劇・映画・文学のあらゆる文化領域において、戦争高揚、愛国心の醸成、国民教化の手段となるよう強制される。一連の文化・芸術活動について、政府や軍部の統制が及ぶ組織や機関が相次いで創設され、戦時下の文化や風俗に対する統制は、大人の領域のみならず子どもの文化領域にまで及んだ。1942年3月には、児童文化を一元化し、統率する中心的な機関とする日本少国民文化協会が発足する。ここで、『子供の時間』の内容も大きな変化を迎えるのであるが、1937年以降の番組の変遷については、稿を改めて論じることにはしたい。

注

- (1) ラジオ放送における童謡を扱った稀少な研究では、金田一春彦の著書『童謡・唱歌の世界』(1978)の第一章「あの頃の子どもの歌—大正・昭和の交のラジオ番組を分析して—」において、1925年から1931年までの『子供の時間』で放送された童謡・唱歌の作詞・作曲家の分類、および歌手・曲調の分類による量的調査が挙げられる。
- (2) 『ラジオ年鑑 昭和6年』(1934) p.338
- (3) 『ラジオ年鑑 昭和6年』(1931) p.331
- (4) 『ラジオ年鑑 昭和9年』(1924) p.173
- (5) 『ラジオ年鑑 昭和6年』(1936) p.253
- (6) 『BKの友』12月号(1927)
- (7) 『こちらJOBK NHK大阪放送局七十年』(1995) p.87
- (8) 『子供のテキスト』4月号(1931)
- (9) 『子供のテキスト』12月号(1934)
- (10) 『子供のテキスト』12月号(1934)
- (11) 『子供のテキスト』10月号(1932)
- (12) 『子供のテキスト』12月号(1930)
- (13) 『子供のテキスト』10月号(1931)
- (14) 屋十二(1931)「日本を廻る(一)」『調査時報』1巻11号
- (15) そのときの記録によれば、「児童音楽団」では、指揮の鈴木幸四郎と伴奏者と児童13名が「おてんとさんの唄」、「てんと虫」、「カミテッパウ」、「子供の大工」、「むかし噺」、「信太の藪」を歌っている。また、これらのグループの創作童謡や郷土童謡などを歌い、評判がよかったとある(遠藤:1996:pp.56-57)。
- (16) 遠藤(1996) p.56
- (17) 『コドモのテキスト』10月号(1932)
- (18) 『コドモのテキスト』6月号(1935)

参考文献

- 秋山正美編『ラジオが語る子どもたちの昭和史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』大空社 1992.
- 岩井正浩『子どもの歌の文化史』第一書房 1998.
- NHK大阪放送局・七十年史編集委員会編『こちらJOBK NHK大阪放送局七十年』日本放送協会大阪放送局 1995.
- 日本放送協会『20世紀放送史』日本放送協会 2001.
- 遠藤実『仙台児童文化史』久山社 1996.
- 金田一春彦『童謡・唱歌の世界』主婦の友社 1978.
- 黒田勇『ラジオ体操の誕生』青弓社 1999.
- 小島美子「童謡運動の歴史的意義(20)」音楽教育研究12(9) 12(10) 1969.
- 小山静子『子どもたちの近代』吉川弘文館 2002.
- コロムビア50年史編集委員会(編)『コロムビア50年史』日本コロムビア1961.
- 園部三郎・山住正己『日本の子どもの歌—歴史と展望—』岩波書店 1962.
- 竹山昭子「ラジオ番組にみるモダニズム」南博(編)『日本モダニズムの研究』ブレーン

出版 1982.

竹山昭子『ラジオの時代』世界思想社 2002.

津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館 1996.

鳥越信『日本児童文学』建帛社 1995.

長田暁二『童謡歌手からみた日本童謡史』大月書店 1994.

日本放送協会編『日本放送史』日本放送協会 1951.

日本放送協会関西支部編『ラヂオ聴取者は何を好むか？：昭和六年度嗜好調査』日本放送出版協會関西支社 1932.

日本放送協会放送史編集室編『日本放送史 上巻』日本放送出版協会 1965.

畑中圭一『文芸としての童謡 童謡の歩みを考える』世界思想社 1997.

畑中圭一『街角の子ども文化』久山社 日本児童文化史叢書 2000.

堀内敬三『音楽明治百年史』音楽之友社 1968.

水越伸『メディアの生成』同文館 1993.

山中恒『ボクラ小国民と戦争応援歌』音楽之友社 1985.

吉見俊哉『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社 1995.

Philippe Aries *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Éditions du Seuil Paris 1960. 杉山光信・杉山恵美子（訳）『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 1973.

雑誌

『ラヂオ年鑑 昭和6年（昭6）－昭和16年（昭16）』（1931－1940）誠文堂.

（出版者変更：誠文堂（昭和6年）→日本放送出版協會（昭和7年－）＊昭和14年は、発行されていない）

『ラジオ年鑑 昭和17年（昭17）－昭和23年版（昭23）（1941－1948）日本放送出版協会.

『調査月報 1巻1号（昭3.5）－4巻3号（昭6.3）』（1928－1931）日本放送協会.

『調査時報 1巻1号（昭6.5）－4巻6号（昭9.3）』（1931－1934）1（1－11, 13－16）, 2（1－2, 4－24）, 3（1－13, 15－24）, 4（1－6）日本放送協会.

『放送 = Broadcasting』（1934－1941）4巻7号（1934.4）－11巻8号（1941.9）日本放送協会.

『放送研究』1巻1号（1941）日本放送協会.

『放送人』1巻1号（1941）日本放送協会.

（変遷）

『調査月報』（1928－1931）→『調査時報』（1931－1934）→『放送』（1934－1941）→『放送研究』（1941－194?）→『放送人』（1944）

『子供のテキスト』（『コドモノテキスト』）11月放送号（1928）－4月号放送号（1941）

資料（出典）

図1『NHK大阪放送局七十年史編集委員会』（1995）

図2『子供のテキスト』12月号（1933）

図3『子供のテキスト』10月号（1933）

図4『子供のテキスト』12月号（1933）

表2 1935年6、7月にみる『子供の時間』の音楽プログラム（『放送月報』5巻6号、5巻7号）

月	日	発局	種目	題目	出演者
6	3	東京	マンドリン	「葉の中の七面鳥」ほか	高久肇 タカタ・マンドリン・アンサンブル
6	3	東京	ハーモニカ	「カール王行進曲」他	松林和男
6	3	東京	うたのおけいこ	満州国皇帝陛下奉迎歌	梁田貞
6	4	大阪	ハーモニカ	「大成丸の首途」ほか	大成丸ハーモニカバンド
6	8	東京	讃沸歌	「甘茶踊」他4曲	大正大学日曜学校生徒
6	8	東京	讃沸歌	「花まつり」他5曲	傳道会館日曜学校生徒
6	9	東京	合唱	「荒野の薔薇」他7曲	JOAK唱歌隊
6	12	東京	管弦楽	行進曲「士官候補生」他2曲	東京オーケストラ
6	14	台湾	お話と唱歌	葉山の子供達のお話と唱歌	角板山教育所児童他
6	15	東京	木琴独奏	行進曲「エルドラード」他3曲	朝吹英一 ピアノ伴奏 朝吹文子
6	20	大阪	うたのおけいこ	「僕の希望は音楽家」他1曲	武岡鶴代
6	21	大阪	うたのおけいこ	「僕の希望は音楽家」他1曲	武岡鶴代
6	21	東京	管弦楽	組曲「子供の領分」ドビュッシー作曲	日本放送交響楽団 指揮 ニコライ・シフェルブラット
6	22	東京	童謡と唱歌	「美洲」他	杉並第四尋常小学校児童
6	22	東京	童謡と唱歌	「我が帝国」他	西巣鴨第五尋常小学校児童
6	24	東京	唱歌劇	「李兵衛さんの仔山羊」	JOAK唱歌隊
6	26	朝鮮	童謡	「翁草」他7曲	木下洞少女会 伴奏 李樂應
6	29	東京	奉祝唱歌	「天長節唱歌」「君が代」	女子放送合唱団
6	29	東京	室内楽	行進曲「スペインの鐵兜」他5曲	オルケストル・ピガール 指揮 小暮正雄
6	20	東京	童曲とお琴	「童曲花園」他2曲	宮城道雄他
6	20	大阪	童謡	「うぐいす」他7曲	大阪放送合唱団
6	21	東京	合唱	満州国皇帝陛下奉迎歌	宝塚少女歌劇雪組声楽専科生徒
6	21	大阪	レビュー・オペレッタ	「メルヘンランド」	宝塚少女歌劇雪組声楽専科生徒
7	2	東京	三絃童謡	「阿蘭蛇船」他8曲	歌 町田句子 三絃 町田嘉章
7	3	東京	合唱と独唱	「春の狭霧」他	JOAK唱歌隊 ピアノ伴奏 丹生健夫 指揮 吉原規
7	6	大阪	童謡	「田舎へ」	大阪放送童話研究会
7	13	東京	独唱と斉唱	「おせんたく」他	中山梶子 伴奏 アルメリア五重奏団
7	15	大阪	お伽歌劇	「石の裁判」	宝塚少女歌劇月組生徒 音楽 宝塚オーケストラ
7	17	東京	うたのおけいこ	「かげぼうし」「僕は小学一年生」	四家文子
7	18	東京	うたのおけいこ	「かげぼうし」「僕は小学一年生」	四家文子
7	18	東京	管弦楽	「各国国家」	日の丸管弦楽団
7	18	東京	管弦楽（解説付）	歌劇「カルメン」組曲	日本放送交響楽団 ニコライ・シフェルブラット
7	31	東京	管弦楽	行進曲「子供とラヂオ」他2曲	東京オーケストラ